

自閉症発症論

2010.2.13

—生物学的素因(もって生まれた遺伝子)か環境因か—

川崎医科大学名誉教授/kids21 子育て研究所

片岡 直樹

自閉症はいつから自閉症か

ヒトの赤ん坊は生後1年間無力の状態である。動物は就巢性と離巢性に分けられる。就巢性は人間と鳥のみである。人間に近いサルは離巢性の代表であり、生まれてすぐ歩いたり1人立ちできる。すなわち、ほとんどの動物は生まれたらすぐ完成品になる。ひとり立ち可能な、生まれながらのすり込み現象が存在するのである。

ヒトは生まれたとき白紙状態で、1年間を費やしてやっとひとり立ちする。ここに定型人間(健常人)と自閉症児が育っていくヒントがある。ボウルビーの愛着理論によると、定型発達児の愛着発達は次の段階を経て育つ。

第一段階(誕生から2カ月頃): 人の弁別をとまなわない定位と発信(非選択的愛着)

第二段階(3カ月～6カ月頃): 1人又は数人の弁別された人に対する定位と発信(選択的愛着)

第三段階(6カ月～2才頃): 分離不安(抱っこをせがむ)

第四段階(3才以上): 自立

自閉症児の愛着発達過程→専門家が考えている自閉症の生まれながらの脳障害説。

第一段階: 混沌(自他が明確でない。世界イメージが混沌としている)

第二段階: 道具(便利な道具としてのみ認識している)

第三段階: 快楽(道具に加え、楽しい存在として認識)

第四段階: 依存(自分の無能さと、愛着対象の有能さを認識)

第五段階: 自立(愛着対象者を探索基地として、自分の気持ちをコントロールし、自立していく)

すなわち、自閉症児は誕生してから愛着が育つ時期、混沌としていて人間への選択的愛着が存在しないということが、世界的に通っている説である。

しかし、私が出会う自閉症児はみんな、定型人間がたどる愛着発達の第一から第四段階までの途中で、頓挫してしまうために、愛着形成が失敗に終わる。この頓挫がなぜおこるのが問題である。赤ん坊が“音”と“光”環境にはまるのである。すなわち、愛着対象(主に母親)が不在になる。ここに自閉症環境発症論が生まれる。

※ADHDの愛着発達過程

これは自閉症よりもっと軽い。第一・第二段階はかろうじて成立するが、第三段階、分離不安で頓挫するのである。多くは、乳幼児後半になると母親を主たる愛着の対象とする。

しかし、分離不安はなく、歩き始めるとよく動きまわる。叱られても少し経つと何事もなかったかのように、母親ににこにこして話しかける。買い物で迷子になっても不安を示すことはなく、再会後も母親に泣いてしがみつくとことはない。